

## 『震災後の心震えた日』

人生には、科学では説明のできない事があるらしい。

8月6日は、震災以来、心震わせる一日になった。

朝からいい天気で、久しく洗ってなかった愛車の1981年製のハーレーダビットソンを車庫から出し、駐車場の真ん中で洗っていた。

ちょっとした傷は、コンパウンドで丁寧にとってあげた愛車は、私に乗ってどこかに行こうよと誘っているようだった。種山あたりまで行こうかなとバイクを走らせた。

陽射しは、肌を焦がす様にきつかったが、トンネルの中はまるで冷蔵庫の中の様だった。冷たい冷気は、Tシャツから出た腕に突き刺さるようだった。

種山にさしかかると何となく海が見たくなり、そのまま足をのぼすことにした。陸前高田市で被災し亡くなった佐伯に線香でもと思っていた。国道396号は、世田米で高田方面と大船渡方面に分岐する。その時、頭をよぎったのは、大船渡から仙台の診療所に通って下さっていて、震災以降、連絡がどうしても取れない一人の患者さんのことだった。

彼女は、バスや電車を乗り継ぎ、わざわざ仙台まで出向いてくれていた同い年の方だった。

その時、どうして彼女のことが思いついたかがわからない。でも愛車は、大船渡方面に進んでいた。

大船渡市吉浜がカルテに書かれた彼女の住所だった。越来（おきらい）で腕に喪章をつけたおじいさんに吉浜ってどっちと聞くと、あの山の向こうだと指差した。バイクならトンネルくぐってすぐだよ！

二つ目のトンネルを抜けると釜石市の標識が目にとまり、慌てて引き返し、側道を下がってくると海辺が目に入ってきた。バス停で石垣に腰掛けているおばあちゃんに声をかけた。

橋本千賀子さんの御宅をご存知ないかと...

橋本さんちは、もっと先だよ。何とか園の栄養士の千賀子さんだえ？何とか園の何とかは聞き取れなかった。もっと先に神社があるから、そこのあたりまでまた聞けばわかると。

おばあちゃんに礼を言って先に進むと、神社があったが人影がない。ゆるいカーブの先でバイクを止めるとそこに橋本美容院があった。

同じ名字だし、何かわかるかと思い、人を探していると、隣の家から若い女性が出てきた。

あの～、橋本千賀子さんのご自宅は、ご存知ないですか？と聞くと、ここですよ！

ほとんど見ず知らずの土地に出向き、ほとんど迷うことも無く、彼女の家に向き着いた。

うつむき加減に、震災で千賀子さんは亡くなったとお聞きしてと切り出しと...

亡くなったのはお父さんで本人は、元気でおりますよと言う...心が震えた。まもなくご本人が現れた。こんな事ってあるのか？

震災後、沿岸からおいでのお客様のほとんどに連絡をした。彼女には、どうしても連絡が取れず、住所からGoogleアースで捜してやっと通じた電話の先のドライブインのおばあちゃんの話では、津波にさらわれて帰って来ていないと言っていたのに...

いま、私の前にいるのは、笑顔の彼女だ！涙が溢れてきた。抱きつきたい気分だった。私

の涙が彼女の涙も誘ったようで目元がうるんでいた。

吉浜では初盆は、7日からなそうである。盆の入りにお父さんが私を連れてきてくれたようだった。

心の震える日が今日と言う日だった。

### 『心震える日』

震災から5ヶ月の日曜日、  
レストアして戻ってきたハーレーダビットソン、  
埃を洗い落として、  
ちょっとそこまでのつもりが、  
海沿いにまで足が伸びた。

大船渡の吉浜、  
そこがその人の暮らしていた町、

腕に喪章つけたおじいさん、  
吉浜っての問いに、  
『トンネル抜けたあつつ側だ』の答え、

トンネル抜けた先のバス停に、  
背の曲がったおばあちゃんが一人、  
橋本さんちはの問いに、  
『もすこす、さぎだ』の答え、

さらに進むと、神社があった。  
人影もなく、たずねる人もいない、  
車2台がやっとすれ違える道を、  
さらにバイクを走らす。

一件の家があった。  
門には、紙のお札が風になびいている。  
絶え間なくお客が出入りしている。

一人の女性に声をかけた。  
橋本千賀子さんの御宅をさがしていると告げると  
『うちですけど、』の答え、

千賀子さんが震災の犠牲にというや、  
『亡くなったのは、お父さんで、本人いますよ』  
そんな、  
言葉を失っていると、  
『千賀ちゃん』の声に返事が聞こえた。

なんと、  
亡くなったとばかり思っていた彼女は、  
笑顔とともに、私の前に、

心が震えた、  
涙が溢れた、  
彼女の目も潤んだ、

こんなことって、  
私をここに誘ってくれたのは、いったい。